

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第976号 平成27年8月6日

生きる道

手稲養護学校の校長室に、「一本の指が動いたら、そこに私の生きる道がある」という色紙が飾られています。

この色紙に書かれている一節は、長野県にある諏訪養護学校の滝沢 石初代校長の言葉といわれています。

この言葉と最初に出会ったのは、私が教育長として手稲養護学校を訪問した時でした。校長室に入った時に、まず目に飛び込んで来たのは一枚の色紙で、そこに書かれていた言葉に触れた時、思わず私の胸はギュッと締め付けられるような感じに襲われました。

それ以来、私はずっとこの言葉の意味を考え続けています。

「一本の指が動いたら、そこに私の生きる道がある」

この一節は、肢体が不自由な子が、今まで手も足も動かさなかったのに、ある日一本の指が動いた。そこに自分が生きている証を見出した、そんな心境を代弁したものとイえるでしょう。

一口に障がい児といっても、障がいの程度は子ども達一人一人異なりますが、今まで出来なかった事が出来るようになった喜びや達成感は、どの子にも共通しています。

養護学校では、全ての子ども達が、そうした喜びや生きがいを感じられるように、日々教育実践をしています。

肢体不自由児のための学校である長野県花田養護学校（元は諏訪養護学校の分校でした）の片桐俊男現校長もその思いは同じで、「子ども達の将来を見通しながら、日々の学習をより充実したものになるよう、子ども達を中心にした、楽しい授業の創造に全力をあげる」と述べています。この片桐校長先生の言葉には、障がい児の思いに寄り添って行こうという強い意志が感じられます。

さて、「一本の指が動いたら…」という一節をどう理解するかといえば、多分、先程申し上げたように障がい児の心境として理解する方が多かろうと思います。それで間違っている訳ではないはずですが。

ところが、私の胸の中では、「一本の指が動いたら…」という言葉が、まるで重石のように存在感を示し「もっとちゃんと考えろ」と訴えかけて来ます。

最近になって、ハタとを感じる事がありました。それは、「一本の指が動いたら…」というのは、障がい児の心境を代弁したものと思っていたけれど、実はそれだけではない。その子に寄り添う教師の目線がその一節には含まれているのではないか、更にいえば、その子と共に生きる保護者の目線もあるはずだという事なのです。

そう考えて、改めて「一本の指が動いたら…」という一節に目をやれば、教師が如何に教師として生きるべきかを厳しく問うものとして、響いて来ます。

教師の使命は、子ども達の内に在る力を引き出し、伸ばす事にあります。その子に障がいがあろうとなかろうと、それは同じはずです。

重度の障がい児で、今は全く指一本動こうとしないけれど、「必ず動かせるようにする」との強い意志を持って、子どもに寄り添い、励まし、そして、訓練する。その結果として、一本の指かも知れないが、動かせるようになった。その瞬間に、その教師は、子どもの指が動いた喜びと共に、「この子の伸びようとする力を少しでも引き出し伸ばして行く」、そこに自分が教師としてある事の意味と、進むべき道があるという確信を得た。

これは私の想像ですが、滝沢先生にはそう実感する経験があり、それが「一本の指が動いたら…」という一節だったのでないかと思っています。

(塾頭 吉田洋一)